

説教 『死の深き淵より』山本護 牧師
聖書 アモス書 8:9~10/マルコによる福音書 15:33~41

イエスが十字架で死んでいく場面は何とも凄まじい。午頃から世は暗くなり、数時間も続いた暗さの中、イエスは母語のアラム語で「エローイ(わが神)、エローイ(わが神)、レマ、サバクタニ(なぜ我を見捨て給うや)」と叫び(マルコ 15:34)、幾度か大声をあげて死んでいった(15:37)。暑い盛り、密雲がかかって暗くなると突風が吹く。土埃煙るこの壮絶な十字架の死に、どんな救いがあるというのか。

「全地は暗くなった(15:33)」。この暗さの中、小さな灯のようなつぶやきが聞こえる。「百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そしてイエスがこのように息を引き取られたのを見て[本当にこの人は神の子だった]と言った(15:39)」。百人隊長は、総督ピラトから死亡確認を任されている処刑の責任者(15:44)。総督の片腕たる男が「本当にこの人は神の子だった」と証言するとは、いったいどういうことであろうか。味方の弟子たちは霧散し(14:50)、敵方の処刑者が「神の子」だと証しする。

十字架の姿はどう見ても絶望だ(15:34~37)。十字架は、何もかもをひっくり返す。イエスの死を確認した敵方の、異教徒の百人隊長がなぜ、「本当に、この人は神の子だった(15:39)」と直感したのか。「神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた(15:38)」からか。これは「神殿に依拠しない新たな信仰が開かれる」象徴であろう(ヘブライ 10:19~20)。ただ垂れ幕が裂ける突発的出来事に驚きはするだろうが、その程度のことで、人格・知性・勇気・経験豊かな百人隊長が動揺したりはしない。

百人隊長は職務として、イエスの死を間近でじっと見つめた。そして間違いなくその死を確かめた。彼はそこに何を見たのだろうか。分からない。分かることは、他の誰よりも「イエスの死を了解した」ということ。十字架は幻ではない。暗くなった世の、土埃の中の幻想ではない。再び生に戻るなど決してありえない不変の死を見て、百人隊長は「本当に、この人は神の子だった」とつぶやいた。

イエスを、人間と一線を画す特殊な「神の子」に仕立ててはならない。私たちを復活へ導くために、弱さと限界ある普通の人間の所にまで降りて来られた方なのだから(ヨハネ 6:38~39)。すなわち、人間としての完全な死から、後戻りすることのない死から、復活の道は開かれる。そういえば復活の最初の証人は女たちであった(マルコ 16:1~11)。女たちは十字架の時、どこにいたか。「婦人たちも遠くから見守っていた。その中には、マグダラのマリア、小ヤコブとヨセの母マリア、そしてサロメがいた(15:40)」。それだけではない。「イエスと共にエルサレムへ上って来た婦人たちが大勢いた(15:41)」。

十字架の傍らにいた百人隊長が「本当にこの人は神の子だった」と証言した。女たちは遠くで見、叫び声を聞き(15:37)、その死を了解した(15:47)。弟子たちはここにはいない。復活の道は、後戻りできない死の深き淵から開かれ、「神の子」の姿はもっとも遠い所から明らかにされていく。十字架に秘められた光は、殺した者によって見いだされた。続いて女たちがそれを証言し、やがて弟子たちへと伝えられていく。復活の光は、暗い世に建てられた(15:33)、十字架の死という深き淵に現れる(15:39)。

遠い預言者の声にも、十字架の嘆き(アモス 8:9~10)と、新たな創造を垣間見ることができる(9:13~14)。



【おまけのひとこと】

通常 波紋は中心から外側へ広がる これは外側から中心の十字架にむかうさざ波 十字架は遠くの塵を引き寄せ 手前の塵も吸収し 最後には自らをも飲み込んで消滅する重力場のイメージか